

遺跡見学会報告 南北海道の縄文ツアー

日時 2021 年 8 月 28 日（土）10 時～12 時
場所 大船遺跡、大船 B 遺跡、垣ノ島遺跡
参加 20 名

世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産となる 2 つの史跡と函館市南茅部地域で本年度行われている縄文遺跡の発掘調査を見学しました。

最高気温 28℃を超える暑い日でしたが、たくさんの方が道南歴史文化振興財団の事務所前に集まってくれました。遺跡へ出発する前に、荻野幸男会員（道南歴史文化振興財団）から大船 B 遺跡の概要と出土遺物について説明をいただきました。



図 4.1 大船 B 遺跡出土遺物の説明をする荻野会員

4.1 復元竪穴住居が魅力の大船遺跡



図 4.2 120 軒以上の竪穴住居跡が検出された大船遺跡の解説をする吉田会員

世界文化遺産の構成資産の一つである大船遺跡は、復元された竪穴住居が魅力です。120 軒以上の竪穴住居跡が発見されています。吉田会員（函館市教育委員会）から解説をいただきました。

4.1.1 クリ材で復元された竪穴住居

竪穴に柱・梁・垂木を加えた復元竪穴住居です。躯体を構成する木材は、発掘調査成果を踏まえ、クリ材が使用されています。クリは北海道には自生しないと言われていいますので、大船遺跡出土のクリ材はもともとは本州東北地方北部にあったものが遺跡周辺に持ち込まれたよう

です。吉田会員は「クリを栽培していた、とまでは言えないが、縄文時代の人たちはクリ林に対して何らかの管理を行いながら利用していたと考えられます」と述べました。



図 4.3 発掘調査成果にもとづいて、クリ材で躯体を復元した竪穴住居

4.1.2 竪穴住居の内部は 20℃

復元された竪穴住居の屋根材はカヤで葺かれています。洞爺湖町入江貝塚や岩手県御所野遺跡では土葺き屋根の復元をしていますが、大船遺跡では土葺きを積極的に肯定する資料が得られていないため茅葺きとしたそうです。



図 4.4 茅葺きの復元案を採用した竪穴住居

見学当日、外気温は 28℃でしたが、復元住居の中は約 20℃で非常に涼しい環境でした。住居内には炉が設置され、湿気抜き、明かり取りなどのために、一年を通して火を焚いていたと考

えられるそうです。炉の手前にみえる小さな穴は、胎盤を埋めた穴ではないかとのことでした。



図 4.5 夏でも涼しい復元住居

4.1.3 もっとも深い竪穴は 2.4m

大船遺跡の竪穴住居は非常に深いことが特徴です。「冬寒いので深い竪穴を必要とした」という説明は、より寒さの厳しい道東や道北の竪穴住居が必ずしも深いわけではないことから成立しません。吉田会員は「火山灰層を掘り抜いて、固いローム層まで到達するためにはこのぐらいの深さが必要だったのではないかと推測します。



図 4.6 大船遺跡を代表する深さ 2.4m の竪穴住居

4.2 後期初頭の集落跡が見つかった大船 B 遺跡

大船遺跡から少し北に進んだところに大船 B 遺跡があります。見学日にはすでに調査完了状態で、足の踏み場もないほど竪穴住居跡や柱穴が検出されていました。



図 4.7 調査が完了したばかりの大船 B 遺跡

4.2.1 厚く堆積する火山灰

調査担当者の荻野会員に土層断面の解説をしていただきました。上層の白い火山灰は昭和 4 年 (1929) 降灰の Ko-a 火山灰、その下層に Ko-d (1640 年) や B-Tm (923 年) が見えます。



図 4.8 大船 B 遺跡の土層断面

4.2.2 31 軒検出された後期初頭の竪穴住居

大船 B 遺跡で検出された竪穴住居は中期 2 軒、後期初頭 31 軒、後期後葉 1 軒です。後期

初頭の竪穴住居は何軒も重なって構築されています。



図 4.9 縄文後期の竪穴群

4.3 縄文時代の景観が残る垣ノ島遺跡

垣ノ島遺跡は海岸段丘上に立地しています。現在の集落は段丘の下にありますが、遺跡からは全く見ることはできません。



図 4.10 縄文時代と変わらない景観が広がる垣ノ島遺跡

4.3.1 バリアフリーな遺跡

垣ノ島遺跡は一見平坦ですが、それなりに傾斜があります。園路はすべてスロープが設けられ、最大でも 4% 以下の勾配となるように設計されていて、誰でも遺跡を楽しめる配慮がなされています。電動キックスケーターのような移

動手段の導入も考えられそうです。



図 4.11 バリアフリーに配慮されたスロープ

4.3.2 発掘体験コーナー

史跡の一角には発掘体験コーナーが設けられています。箕や移植ゴテ、ハケなどの発掘道具が一式用意されています。本物の土器を発見することができる魅力的なアクティビティです。



図 4.12 本物の縄文土器が出土する発掘体験コーナー

4.3.3 地表面に残る竖穴のくぼみ

垣ノ島遺跡では、地表面に竖穴のくぼみがわずかに残っています。整備ではこのくぼみを活かし、草刈り方法を変えることによって地表面で遺構を観察できるような配慮がなされています。

4.3.4 大規模な盛土遺構

垣ノ島遺跡の特徴は「コの字」状の大規模な盛土遺構です。火山灰が厚く堆積していること



図 4.13 刈り残しで表現した竖穴

を活かして保護層を最低限とし、できるだけグラウンドレベルの変更が少ない状態で盛土遺構を観察できるよう工夫されています。



図 4.14 盛土遺構

4.3.5 史跡に優しい遺構解説板

垣ノ島遺跡で目を引くのは、基礎を打たない構造の解説板です。解説板の下部フレームの上にコンクリート製の枡を置いただけのいわゆる重力式の構造です。基礎が不要なので地下遺構への影響もなく、不自然な保護盛土も必要としません。コンクリート枡は収納スペースになっていて、中には解説用グッズが納められています。素晴らしいアイディアです。

4.3.6 現代構造物が全く見えないロケーション

吉田会員は「垣ノ島遺跡は現代の構造物が全く見えない遺跡です」と強調します。舌状台地



図 4.15 垣ノ島遺跡の解説板は地中に基礎を打たず、解説グッズ収納を兼ねたコンクリート柵で固定されています

の先端から遺跡を振り返ると、史跡に関する構造物以外、現代の構造物が何も見えません。こうしたロケーションも世界遺産の構成資産となる重要な要件だったのだと、改めて感じることができました。



図 4.16 海岸段丘の縁から遺跡を振り返ると、ガイダンスや体験施設以外に現代の構造物が目に入りません

から復元案までの変遷を追える構成となっています。大船遺跡特有の深い竪穴住居を活かした迫力ある復元です。

一方、垣ノ島遺跡では、遺跡のオーセンティシティ（真正性）を強く意識した整備がなされていると感じます。復元的な整備が排除され、遺構そのものを見せる工夫がなされています。また、遺跡景観を非常に大切にしていることも垣ノ島遺跡の整備の特徴です。復元性の少ない遺跡は、わかりにくさをどのように克服するかが大きな課題となりますが、スタッフによる解説がこれを補うように積極的に行われ、ハードウェアに頼らず、ソフトウェアの充実によって史跡理解を深めようという狙いがあるのでしょう。

両遺跡の見学は、史跡整備における整備思想の違いや、それにともなう工夫の在り方について学ぶ機会にもなりました。

4.4.2 減少する緊急発掘調査

大船 B 遺跡は、今年度道南で行われた数少ない緊急発掘調査の一つです。かつては休みなく行われていた緊急発掘調査が激減していることは、埋蔵文化財保護の観点からは喜ばしいことです。しかし、緊急発掘調査の減少は、発掘調査技術の継承の難しさや新たな発見の減少にもつながりかねません。道南の発掘技術水準の維持や魅力ある考古学活動をどのように構築していくのか、緊急発掘調査の縮小が考古学の縮小につながることをのしないよう、当会がその役目を果たしていく必要があると感じました。

（石井淳平）

4.4 縄文遺跡の見学を終えて

4.4.1 整備方針と遺跡の姿

大船遺跡は視覚的にわかりやすい復元的な整備がなされています。屋根を葺いた復元住居、躯体のみ復元した住居、竪穴遺構のみを復元したものを一堂に見ることができ、発掘調査成果